町民文芸

只見短歌会　九月詠草

大塚栄一　指導

被災地の役所引揚げし跡地には夕日に広くコスモス光る　古川　英子

子や孫に曾孫伴ひ生家にて宿泊出来る幸せ思ふ　吉津　政枝

豪雨被害の土嚢積みゐて流されし人の行方のいまだ分からず　五十嵐夏美

洪水后二か月経しも池に入る水は濁りて緋鯉も見えず　渡部ゆき子

肌寒き日々の続けばいち早く冬物揃へ姪持ちくれぬ　五十嵐英子

災害で寸断されし国道を迂回し通る車の多き　馬場　八智

洪水は内玄関に渦巻きて孫のサンダル幾つも浮かぶ　目黒　富子

水害は夢の如くに過ぎたるも稔りし稲穂にとんぼも飛ばず　渡部ヨリ子

友逝きて日ごと落ち込むわれと聞き慰むと来しひともまた泣く　新国　洋子

（出　詠　順）

只見俳句会　十月例会

目黒十一　指導

大根の間引きをしつつ母想う　都

秋浅し夕暮おしむ子供声　邦夫

スッと来て着地やわらかに鬼やんま　洋子

猫じゃらしくすぐってゆく風のあり　リウコ

青天や稲刈る音を遠く聞き　一穂

昇りくる十五夜拝む農夫かな　康女

初物の栗飯供え秋彼岸　敦子

骨納む墓やひと枝吾亦紅　笑羊

見廻りの畑に白露かがやけり　礼

松籟や一段落の秋仕舞　恒夫

野に送る友の笑顔や秋桜　邦男

目に見えぬ原発被害梨香る　吉児

邂逅の友を迎えて夜半の秋　隆堂

姑殿手元まめまめ花茗荷

単線に替へて目につく豊の秋

転作は本意にあらず蕎麦の花

疲れたる老女居りけり盆の明け

台風に揺れる木の枝家内も

朝顔の絡み合いたる蔓重し

Tシャツの案山子ひねもす肩の張り

秋深む大地平らに暮れゆける

夜寒星ひとりひとりに道岐れ

貰い手のなき夕顔の実や太し

山色の茸の色という子等と

ホームステイの学生帰国今朝の秋

秋闌（た）くやつまめば消えず甲の皺